

武田泰運公集

卷之四

武田泰淳全集

第六卷

筑摩書房

武田泰淳全集 第六卷

昭和四十六年十二月二十日 第一刷発行

著 者 武 田 泰 淳

発 行 者 竹 之 内 静 雄

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話 東京(元)七六五一(代表)
振替 東京 四 一 二 三
郵便 番号 一〇一九一

印刷 株式会社 三 松 堂
製本 和田製本工業株式会社

(分類) 0393 (製品) 72406 (出版社) 4604

第六卷 目 次

土魂商才	3
成金から財閥まで	23
妖美人	38
甘い商売	71
鶴のドン・キホーテ	84
齒 車	126
おとなしい目撃者	140
愛情犯罪人	156
透明人間	170
振り出しにもどる	199
地下室の女神	211

貴族の階段	225
「ゴジラ」の来る夜	379
白昼の通り魔	408
残酷でない物語	432
美しい村	437
解説	449
問題	459

菅野昭正

小

説

6

士魂商才

一徳伝一翁の十三回忌にあたつて、翁の一生をしのぶ座談会が、某ホテルで催された。集まるものは、一徳運輸会社の現幹部。三井・三菱等の重役。電力関係の専門家。運輸や土木方面の官吏、警察署長や町内有力者、それに遺族たちである。横浜の一回漕店主から「天下の一徳」にまでの上った故人の一生は、波瀾に富んでいるから、出席者の懐旧談も、にぎやかに活気づいている。満洲・朝鮮・台湾における地盤は失ったが、日本全国の支店は戦後も数を増している。もともと、運搬のむずかしい重量もの、大型機械の取扱いを得意とする会社であるから、水力・火力の発電所、地方工場などの設備の拡張が行われる時代には、景気が良いのである。

署長が列席しているのは、自分の町に警察署を建てさせるため、かつて翁が、すすんで敷地を寄附したからである。三井・三菱は、外国から輸入する、貴重な最新式機械の陸揚げを、受けもってもらつたため、翁のはたらきを、トク

としている。横浜、神戸、小樽など、港々の税関その他、めんどろい臭い官庁の手つづきは、一切御免というぐらい顔もきいている。そのため、運輸や土木の役人たちの間に、知己が多い。

運輸業者と言っても、最近では、みんな紳士である。だが、伝一翁が始めたころの回漕業者には、一か八か、身体をはって男を売るような、荒々しいところがあつた。「士魂商才」などという掛軸を、陸軍大臣からもらつたりして、巨万の富を残したと伝えられる伝一翁も、四十代までは何を企てても、芽が出なかつたのである。内地でやり切れなくなつて、脱走した台湾からも、上海からも、シリに帆を揚げて逃げ返つて来た。兄弟にも、女房にもさんさん苦勞をかけたあげく、やっとすがりついた一本の藁が、運輸業。それも、かんじんの貨物を積みこむ木製の舢舨^{はしげ}さえ、一隻も持たずに、無鉄砲にはじめた仕事だった。鋼製の舢舨^{はしげ}だけでも、百隻を越す現状とくらべ、問題にならない。もしも創

業当時の顔ぶれが、一人でもこの場に出席していたら、会の空気がガラリと変っていたことであろう。翁はもとより、大正、昭和の社長も次々と死亡して、配下の腕ききも、当時の連中は、ほとんど生き残っていない。

だいたい、想い出の会などというものは、遺族側は、しみりしてしまつて、来客の語るのに耳すますのが例である。ことにこの座談会では、一徳家の家族たちからの発言が少なかった。つまり、現在の「一徳家の人々」は、伝一翁なる「怪人物」が、はたして、いかなる人間であつたか、うまく判断ができないのである。偉かつた、大物だつた、とうわさは聞いている。伝記も出版されている。翁の買収取つた大邸宅に住み、その遺産で、楽な暮しをしている。たしかに、伝一翁が奮闘してくれたればこそ、こうやつて上流階級としての、つきあいも出来るのだと、その程度の感謝感激はしている。だが「お祖父さま」が、どんな大人物だつたのか、ほんとのところ、ハッキリつかんでる子孫はいないのである。

生きている人間に対する評価が、そもそも一定しないのであるから、死んでしまつた故人については、まあまあこんなところ、という想像にとどまつている。会社の現職員も、一徳一家も、その漠然たる評価だけですましておいて、一向にさしつかへはないのである。今さら伝一翁が、大悪

人であつた、或は大善人であつたと、評価が急変化したところで、運輸会社の営業や家族の日常生活が、ちぢんだり、のびたりすることもなさそうだ。お互いに、故人のおかげをこうむっているにはちがいないが、また、故人とは全く無関係に生きていると称しても、さしつかへはない。

伝一翁は、子供運のわるい男だつた。最初の奥さんとのあいだに生れた男の子は、若死にした。二度目の奥さんとのあいだには、子供が生れなかつた。したがって、現在の「一徳家の当主」は、翁の血を直接にうけついでいない。伝一翁の弟の家から養子にもらわれた人の、そのまた子供である。母方の血が二代にわたつて、伝一翁の血をうすめてしまつているのだから、子孫とは名ばかりで、翁との血のつながりが、どの程度のものか、怪しいものだ。伝一翁は見るからに仕事師らしい大男で、人を威圧するおもむきがあつた。当主の源一は、弱々しく神経質で、回漕業はおろか、およそ実業なるものに不向きな三十男だ。

源一氏は、会場の奥に飾られた伝一翁の写真を、なるべく見ないようにしている。押し強そうな、大きな顔が気に入らないばかりではない。例の「士魂商才」の掛軸のほかに、各宗派の大僧正からいただいた、いわゆる御染筆というのが、写真の左右にずらりと掛け並べてある。多額の寄附をおさめられた大僧正たちが、それぞれ「福寿無量」

とか、おめでたそうな文句を、即座に書いて与えたのであらう。美術品としては、三流品以下の、妙な観音さまの木像も、持ちこまれている。伝一翁が日夜礼拝した遺愛の仏像だという。それら品々のかもし出すふんい気が、グロテスクであるせいとか、伝一翁の一生までが、何かはなはだグロテスクなものに、思われてくる。今、思われてくるのではなくて、つねづね、そう感じられてならなかったのだ。結局、日本では、今までのところ、成功したタイプ、成功できる人物は、この種の男だったのかと、考えて、源一氏は憂鬱になる。

源一氏は、ガサツなエネルギー男がきらいなのである。蛮勇、太ッばら、サツマハヤトの豪傑ぶり、豪放ライラク、カカ大笑、粗野、粗暴、粗雑、こんな匂いのするものが肌に合わない。むしろ恐れている。武張ったもの、汗くさいもの、血なまぐさいもの、いかめしいもの、軍隊、警察、その他、伝一翁のなれ親しんでいたものに、一切ちかよりたくない性ぶんである。

「お祖父さま、死んだの」五つになる女の子は、のんびりと源一氏にたずねる。

「そう。お祖父さまが、なくなってから十三年たったからね。今日は、みんなでお祖父さまのお話をしながら、御馳走をたべるんだよ」源一氏は、優雅な態度で、女の子に説

明してやる。

「この写真、お祖父さまの死んだ写真?」

「そう、死んだお祖父さまの写真だよ」

「これ、死んだ顔?」

「いや、この御顔は、まだ死なない時の顔さ」

「死んだ顔じゃないの?」

「そう、お祖父さまはなくなっただけ、これは、死んだ顔じゃない」

「へんね」

「どうして」

「だって、死んだのに、死んだ顔じゃないんだもの。死んだら、顔がなくなるんでしょ」

「お嬢さん、お利口ですこと」と、女客の一人がお世辞を言った。

「やっぱり、お祖父さまの御血すじですものねえ。お嬢さんは、お祖父さまの生れかわりですわね、きつと」

伝一翁が生れかわった女性だったら、どんな女かと、源一氏はうんざりする。

来賓が起立して、翁の元気な仕事ぶりを紹介している。

「明治のはじめは、警察の署長と言えば、大部分が鹿児島県人でしたもんな。だから、サツマから東京へ出て来て、警察にわたりをつけたのが、第一、あたまのいいところでし

た。そう言っちゃ何ですが、あの時代は、ま、警察政治ですからな。肝心な場所には、みんなサツマッポウがひかえていて、目を光らしていた。警察を味方につけて、警察の力を借りてやったら、どんな商売でも、うまいこといきよったですから」

司会者「木版本の『いろは歌』や『薩摩琵琶』を、警察へ売りに行ったという、話ですが」

「そうです。竹の皮の饅頭笠に、林檎りんごの高下駄、荒竊あきの木綿袴に太帯をグルグル巻きにして、町をのし歩く。町のものは、狂人あつかいする。だが警察署へ行くと『兵児が来おったぞ。よかよか、買ってやれ』というわけで、警察官が争って買ってくれたそうです。なにしろ、署長の命令ですから、買うですよ。それが縁になって、大警視とも知り合いになる。もちろん、大警視は薩摩出身ですから。そこで、警視庁の合宿所の賄方になった。賄方というのは、要するに、鹿児島物産を、現地からとりよせて、売りこむことです。合宿所には、県人が多いから、県の物産なら喜んで買う。なにしろ大警視のお声がかりだから、信用はたいしたもんです。サツマ餅でも、国分煙草でも、何でも売りこむ。そうやって、薩摩屋という、店をひらいた。サツマッポが天下を取ってるあいだは、サツマ屋で通用する。ところが、西郷どんが明治政府に反抗して、西南事変を起

した。鹿児島鹿児島の兵学校の兵児けいが蹶けつ起して、乱を起したです。起して、勝てばよかったが、残念ながら負けたです。勝てば官軍、負けば賊軍。サツマの人間は、昨日までの威勢はどこへやら、たちまち国賊になりさがったです。そうになると、もう、警視庁も、警察署も、サツマの人間が逐い出されて、他県のもんが入ってくるようになる。サツマ屋の看板では、商売がでけんようになった」

司会者「すると、伝一翁は、西南事変には参加しなかったわけですか」

「そうです」八十歳に近い来賓は、白髯をしごいて答える。「もしもそのとき、翁が血気にはやって、西南事変に参加して、西郷どんの配下になっていたら、今日の一徳運輸会社はでけなかったわけです。ところが、あの人の、眼さきのきいとったところだ。ずるいと批評する者もいるか知らんが、これはずるいんでは、なかとです。これが商売熱心、商売人の苦心というもので、これがなかったら立身出世はできましえん。翁は、西南事変の失敗で、天下の形勢がガラリと変わるのを見抜いたから、思い切りよく、サツマ屋の看板を下げてしまった。そのかわり、茨城物産会社の看板をかかげたです」

（厭いやだなあ、と思って、源一氏は先輩の話聴いている。それが平気でやれたとすると、彼、伝一氏の精神のよりど

ころは、一体どこにあったんだろうか。勝った方、勝った方へ、みさかいなしに、ひつついて行く。それで儲けさせてもらう。そんなことで、本心、平気でいられたんだろうか。

「警察の方も、ダメになった。サツマの勢力もダメになった」と、老来資はしゃべっている。

「そこで、翁が目をつけたのは、軍隊です。彼はまず、陸軍と海軍とに出頭して、軍楽隊を借りうけることにした。

陸軍と海軍といえは、言うまでもなく、サツマ兵学校の兵児を攻めほろぼした、いわば敵ですがな。その敵の本拠に出頭して、海軍から十二名、陸軍から十二名、二組の軍楽隊を借りうけたです。これで茨城県へ出かけて、公債の買入れをやった。士族たちが禄をはなれたかわりに、政府から公債をもらっている。それを持ちきれずに手放す。それを翁が、楽隊を連れて行って、買入れる。この公債の売買で、なかなか儲かったものです。軍楽隊を舟にのせて、川筋をブウカブウカドンドンやりながら、利根川へ出る。大きな町に上陸すると、そこで店びらきして、また、にぎやかにブウカブウカドンドンやる……」

五つの女の子は、軍楽隊の真似をおもしろがって、可愛らしく笑った。

「国家の軍隊の軍楽を、チンドン屋として利用して、宣伝

をやったのは、日本でも世界でもあまり例がない」と来資が申しのべると、来会者たちも笑いどよめいた。

「日本の軍隊なんてものも、翁の目から見れば、ちょっとした商売道具のように、見えたんでしよう。次に目をつけたのが、県庁です。東京にちかい県の県庁に運動して、この御用商人になった。あの人は、後にも、朝の割引電車のほかは乗物に乗らなかつたくらいで、ここを攻め落そうと思ったら、何回でも通う。何回でも説く。その熱心さが、たいしたものです。そうやって、顔売る。信用を手に入れる。そうやって、県庁の御用商人として、まず何を納入したかという、例によって警官、おまわりさんですな。

このおまわりさんの着る官服、それからサーベル、靴などを納入した。一手に納めるのですから、利益も大きい。その次に目をつけたのが、監獄」

「カンゴクって、なに？」と女の子にたずねられて、源一氏は「シッ、だまっておいで」と、小声で叱りつけた。ケイサツ、グンタイ、カンゴクと、つづいて来て、西洋音楽の専門家たる源一氏の首すじのあたりには、気持のわるい、明治開化の風が吹きぬけて行く。ショパンもモーツァルトも、シューベルトも生れることのできなかった、暗い野蛮な島国の風が、ピアノでもヴァイオリンでも表現できない奇怪な音をひびかせて、おとなしい文明愛好者の耳をおび

やかす。

「水戸の監獄では、囚人が紙をすいている。これが上質の美濃紙です。この囚人のこさえた紙を、やすく買い占めて、県庁に納入する。安くて上等な紙であるからして、評判が大いによろしい。宇都宮の監獄では、囚人が草鞋わらじを造っていた。その草鞋も買いしめて、この方は県庁ではなしに、足尾の銅山に納めました。坑夫たちに、このわらじを履かせたわけであります。それがまた丈夫で、評判がよろしい」

「おじいさま、いいひとなの、わるいひとなの？」父の気も知らないで、女の子は重大な質問を發する。源一氏が、あわてて「シッ、だまっていなさい」とたしなめると、ふくれっつらして、父の顔をにらむ。その目つきは、いかにも怨めしげで、幼女ながらに、すごみを帯びている。この子、ほんとに伝一じいさんの生れかわりかな、と源一氏は気味がわるくなる。

「ねえ、おじいさま、いいひとなの、わるいひとなの？」

「いいひとにきまっているじゃないか。わるいひとだったら、みなさんが、こうやって集まって下さるはずがないじゃないか」

「わるいひとじゃないの？」

「シッ、どうして、あなたはそんなこと考えるんですか。

困ったひとです」

「だって、あの写真、わるいひとみたい」

幼女の意見に、実は父君も同感なのだ。それだけに、心中うちを見すかされたかと、どきまぎする。「あの顔は、御リッパな顔です。悪いひとの顔じゃありません」

「わるいひとの顔は、御リッパじゃないの？」

「あのね……」と、源一氏は幼女の耳に口をちかよせて、ささやく。映画好きの女の子だから、映画知識を利用して、なだめにかかったのである。

「それじゃ、うかがいますが、おじいさまの御顔はギャングに似ていますか」

「いいえ、ちがうわ、ギャングじゃないわよ」

「それ、ごらんなさい」

「だって、ギャングは、帽子をかぶって、電話かけるひとじゃないの。パンパン、パンッ、パンッ」

ピストルの形に突き出す幼女の指を、父はやわらかく握りしめた。

「では、おじいさまの御顔は、インディアンに似ておりますか。アパッチに似ておりますか」

「インディアンは、インディアンよ。アパッチは、アパッチよ。インディアンとアパッチは、ちがうわよ。おじいさまは、日本人じゃない？ だから、ちがうわよ。アパッチ

は、おっかない顔してるわよ。鬼みたい。おじいさまは、ちがうわ。おじいさまは、アパッチをだましにくる、わるいひとでしょ。あの、アパッチをだましにくる、わるいひとみたい」

源一氏は、とても幼児の発言を封じ切れそうもないので、女中さんの手に彼女をまかせることにした。幼女は、悪漢や怪人の出現してくれる、身の毛もよだつ少年向の劇を見るため、テレビをそなえた娯楽室へと去った。

座談会の方は、源一氏にとって、ますます耳の痛い話題に入っている。つまり、一同が口をそろえてガヤガヤ論じているのは、実業家の野性、キモッタマ、馬力、くそぢからのことなのである。これの欠けた人間は、実業家としてうまみがないばかりでなく、人間としての面白みがない。人生は七ころび八起き、そうそう理窟どおりにいくもんではないのだから、馬鹿なこともしでかしたり、大失敗をやつてのけたり、人間の強さ弱さもムキ出して、大成すべきだ。二十代、三十代で青菜に塩と、しおたれているようにじや、ロクなものになれるはずがない。伝一翁をほめそやしながら、チラリチラリとこちらに向けられる視線は、みんな源一氏の蒼白きインテリぶりを冷笑しているようだ。「ここには御婦人がたもいられるので、少しはばかられますが」精糖会社の社長が、台湾時代の翁の活躍について、

シャベツている。

「伝一翁が基隆で、女郎屋の亭主をやったことがある。これなども、いかにも乱暴で無神経で、文明人として恥ずかしい行為のように思われる方があるかも知れんが、それは、まちがいだ。翁だって、何も好きこのんで、こんな仕事をやったわけじゃない。台湾を支那からぶんどったといつても、それは条約の上でそうなったただけだ。カバヤマ全権と支那（当時は清国）の全権が二人して、汽船の上でそう決めて、調印したです。陸上でやったら、清国の全権は、自分の国の者に暗殺されるかもしれん、そんな物騒な状態だったですから。だから、さア、台湾がこつちのものになったとは名ばかりで、どこからどう手をつけていいかわからない。台湾の支那人がさわぐ。生蕃がさわぐ。日本の領有に反対して、共和政府ができた。向うは向うで、ちゃんと執政官も立てる、内閣も作る、議会までこしらえて、日本政府に反抗しとる。奴らはなにしろ、清国政府がどんな条約を日本とむすぼうが、自分らは自分らで、独立して台湾をやつてこうという意気込みですから。日本軍が上陸して、どんどん進撃したから、その共和政府だけは、倒すことができた。そのあとが、土匪の横行。今流に言えば、レジスタンスとか、ゲリラとかいう奴らだ。城をマクラに討死^{うちくち}というのは、何も日本武士ばかりの専売特許じゃない。

台湾の支那人だって、みんなそれをやった。共和政府は、自分たちの紙幣も発行したし、郵便切手までつくっていた。日本軍が、町から町を占領したって、地方ではあいかわらず、その紙幣や郵便切手が通用してる。占領しました、敵がいなくなりました、あとは焼野原でございます、じゃ話にならないでしょう。その海のものとも、山のものともつかぬ物騒な台湾に、わがサツマの快男児デンイチ氏がのりこんだ。すぐさま台湾総督府の御用商人になったのは、翁の御家芸で、これは別に不思議なこともない。当人は、大貿易商になるつもりですが、向うは戦争のまっさいちゅうであって、取引する品物など、あるわけがない。ある日『なあ、一徳君』と、総督府の大官が、翁に相談をもちかけた。『キミはこの世の中で、何が一ばん好きかな』『ハイ、私の好きなのは、酒と女と金であります』『そうじゃろう。わしも、そうだ。世間の男ども、みなそうじゃろう』と、大官は大きくうなずいて、『ところで、今の台湾は、まだ戦場で、酒も女も金もない。これでは日本人を呼びたくても、やってくる者がない。そこで貴公に一肌ぬいで、やってもらいたいことは、女郎屋の亭主だ。このキイルンの町に、できるだけ早く、妓楼を開設してくれんか。日本の女子をつれてくれば、日本の男子もよりつく。国策にしたがつて、国運の隆盛のためにやる仕事だから、男児として恥

ずるところはなか』『しかし、閣下、私は』『わかつちよる。君の志はわかつちよる。遠大な望みがあればこそ、はるばる海を渡って来た。たかが女郎屋の亭主では、役が不足だと申すのだらう』『いや、何ぶんにも、閣下、私はその方は未経験でして』『ウアッハッハッ。誰が生れたときから、女郎屋の経営を知っとるものか。よか、よか。男が男に、腹をわった話をして、たのんどるんじゃ。ええか、たのんだぞ』……」

ナニワ節のような雄弁を、源一氏は「厭な声だなア」と眉をひそめて、聴いている。早くこの座談会がおわってくれないと、日比谷公会堂のヴァイオリンを聴きに行けなくなる。ソヴィエット・ロシアの名手の、弓と糸のふれあう微妙な音色を想像するだけで、サツマもタイワンも、早くどこかへ消えてなくなれという気持だ。

征討軍に従軍して露営するうち、叛乱軍に夜襲されて、命からがら逃げ出した話。マラリヤにかかって、国策妓楼を売りはらい、三千円の金をにぎって、横浜の弟の家にころげこんだ話。三井物産に日参して、ねばりにねばり、小樽港の大仕事を独占した話。艇を持たないので、青森の港で漁船を買いしめ、それを、小樽へ回送した話。あいにくのシケにぶつかり、汽船の曳航する漁船群が浪に流され、それをかきあつめるのに苦労した話。ドイツから機械を積

んだ外国船が到着しているのに、青森からの船がとどかず、ヒヤヒヤした話。夜が明けてはるかに沖合をながむれば、うれしや買い占めた漁船の影が、一つまた一つと、海上に出現した話。芸者総あげ、どんちゃんさわぎの話……。

酒がまわってきて、話は次第に遠慮がなくなる。来客たちも、あまり故人の遺徳をたたえているだけでは、つまらなくなつて来たらしい。モーニングやフロック、もともとと身体つきに似あわぬ西洋礼服がぎゅうぐつで、カラーの襟元を、もみほぐしている実業家もいる。紋つきの羽織を脱ぎすてる、老人紳士もいる。まっ黒とまっ白とをとり合せた礼服という奴は、日本式でも西洋式でも、顔のゆがみや凹凸、顔色の悪さや、顔のしみなどを目立たさせて、つごうのわるいものである。まして顔面がまっ赤に充血してくると、人間なる動物は、こうでもして無理やり、きゅうぐつな目にあわせておかないと、何をやり出すかわからない。礼服とは、野獸を縛る縄、危険動物をおとなしくさせるための手かせ、足かせであるように見えてくる。針一本落ちても、しずまりかえった「神聖な」殿堂の空気をみだす、音楽会へ出かけて行くのに、酔っていくわけにはいかない。参会者のなかで、源一氏ひとりが蒼白い顔で、ため息をついている。

「一徳さんは、度胸はよかったが、逃げ足もそうとう速い

方じゃなかったですか」

「そうそう。人間、誰でも、腹の太い、度胸の良いと、それだけの男はいからね。表があれば、裏もあるものさ」司会者「伝一翁は、あの通り、あけすけで、物にこだわらぬ人物でしたから、今日はぜひ、表も裏もぶちまけて御話し下さった方が、草葉のかげで、故人も喜ばれると思います」

商店主「一徳さんは、はでな遊びで他人を驚かしなされたが、また一方では、払いをながびかせて、なかなか金を出ししぶったという話を私の父からきいております。ケチというか、妙なところで金にきたなかつたそうですね」

私鉄の重役「さっきの逃げ足の速かつた話ですね。あれ、甲州の金筋、銀筋連中と喧嘩したときの、面白い話があるんじゃないですか。なにか、米俵か、蓆（じ）がひつかぶって、ほうほうのていで東京へ舞いもどったとか」

商店主「ギンスジ、ギンスジというのは、一体どんなものなんです」

警察署長「いや、あれはね。地方の顔役みたいなものでね。何かにつけて文句をつけて、ゆすり、たかりをやる。ギンスジの方が大物でしてね。たとえば発電所の機械をすえつに、一徳運輸会社が東京から甲州へ、人足を派遣しますね。すると向うの金スジが、その作業のじゃまをする。

顔つなぎをしないと、荷馬車もトラックも動かせんようになる」

私鉄の重役「会社の方で、私よりくわしい方がいられると思うんですが。私の知っている話だけ、チョッと。向う側との交渉がまとまらないうちに、一徳組が工事をどしどし進める。場所は、そうそう中央線の猿橋です。太い水圧バルブや、発電所のモーター、どれも五百トンとか一千トンとかいう重量ものですから、駅で荷おろしする、ダムまで山道をはこぶとなったら、喧嘩相手がいなくなつて、並たいていじゃない。それを敢行できたのは、一徳組に、腕ききの職人や人夫がそろつていたからです。邪魔だてしても成功しないから、ゴウを煮やした金スジ連中が、宿屋へのりこんできた。日本刀を抜いて、夜中に斬り込みをかけてきた。伝一翁は、陣頭指揮のつもりで、泊りこんでいました。宿の者はバラバラ逃げ出す。伝一翁も、まっさきに逃げ出す。裏の薪小屋へ、すばやくかくれた。そこで米俵が何かひっかぶつて」

一徳運輸会社の専務「ええ、炭俵をかぶつて、ふるえていたそうです。そのまま、手を打つひまもなしに東京へ逃げかえつた」

重役「ああ、炭俵でしたか。そのとき一徳組の若い衆で、一人だけ勇敢に斬りむすんだのがいたそうですね」

専務「はあ。中島留吉といって、当時まだ十七歳の少年でした。これが居なかったら、翁も腕一本ぐらい斬り落されてるところでしょう。一徳組に、しっかりした働き者が多かったことは、あなたの御話の通りです。中でも、この留吉という男は、いざという時には、かならず危険を冒して出て行く」

警察署長「ああ、中島留吉ですか。あれは一時は新橋あたりで、鳴らした男でしょう。月島の土木業者と喧嘩して、月島の血煙とか、河岸の血の雨とか、当時は有名だった」

専務「そうです。山梨の金筋でこりてから、伝一翁は喧嘩の現場には、一切顔を出さないことになった。二十になるか、ならぬかの留吉を、五十を越した翁がたよりにしている。月島の鉄工場へ、三井が特殊ケーブルを注文した。

一徳と三井は親子の関係ですから、このケーブルの運搬は、一徳がたのまれた。ところが月島には、土木業のS組ががんばつていて、やはり顔つなぎをしないと、荷を鉄工場から運び出させない。向うは工場の表門を勝手に閉めちまつて、二十名の組人夫が武器を持ってひかえている。コン棒、テンビン棒、鉄棒、日本刀、トビグチを手にして、今日の言葉でいえば、ピケを張っている。留吉は配下の者に仕込杖を持たせ、二十台の車を引かせてでかけた。その時の喧嘩で、留吉は、頸部、胸部、腹部、背なか、両手両脚、全